

信行要文 ④ 第十一回 法華講夏期講習会 第四期

（平成二十六年六月二十九日）

皆さん、おはようございます。

本年度夏期講習会第四期に当たりまして、皆様方には深信^{じんしん}の登山、まことに御苦労さまでございます。

恒例により、テキストに従って、御書の要文についてお話をさせていただきます。

本日は、テキスト七ページの『寂日房御書』からお話をしてまいります。

11 寂日房御書

昨日は人の上、今日は我が身の上なり。花さけばこのみなり、よめのしうとめになる事候ぞ。信心をこたらずして南無妙法蓮華經と唱へ給ふべし。（御書一三九四^ぎ—一行目）

この『寂日房御書』は弘安二（一二七九）年九月十六日、日蓮大聖人様が五十八歳の時に、寂日房を通じてある御信徒に与えられた御書であります。

本抄には、ただいま拝読した御文のほかにも、たいへん大事な内容が認め^{したた}られておりますので、初めにそれについて少しお話をしたいと思います。

まず、人間として生まれることはまことに稀^{まれ}である上、御本尊を信受できたのは過去世の深い宿縁であることを述べられております。そして、

「日蓮は日本第一の法華經の行者なり」（御書 一三九三^ぎ）

と述べられまして、勸持品の二十行の偈^{げもん}文は、日本国のなかにはただ日蓮一人が、これを読まれたと仰せであります。

また、八十万億那由他の菩薩は、口には述べたけれども、それを修行した人は一人もいない。だから、このような不思議の日蓮を生み出せしところの父母は大果報の人である、と述べておられます。

ただいま申し上げました「二十行の偈」とは、法華經勸持品のなかに説かれる偈文のことです。「偈」とは、仏典のなかで韻文形式を用い、仏様の徳を讃歎したり、あるいは法理を述べられたもので、四句から成^なっているのです。私達が朝夕の勤行で読誦するなかに寿量品の「自我偈」がありますが、自我偈の「偈」はこの偈文の意味です。

この偈文は、四句で一行、一つの偈となっています。例えば、自我偈の初めに、

「自我得仏来 所經諸劫数 無量百千万 億載阿僧祇」（法華經 四三九^ぎ）

という御文がありますが、それぞれ五字で一句となっていて、四句で一偈となるという具合です。

お経のなかには多くの偈がありまして、方便品のなかにもあります。勤行で三転読誦する十如是の御文に続いて、

「世雄不可量 諸天及世人 一切衆生類 無能知仏者」(同 九〇〇[㊦])
から始まる「世雄偈」という偈があります。

方便品は十如是のあとも、実は長く続いておりまして、私が小僧の時はそれを勤行で読んでおりました。今は十如是までしか読みませんので、皆さんのお経本にも載っていませんが、その世雄偈も四句で一偈となっております。

同様に、勸持品に説かれる偈文も、五字で一句となっている偈文が二十行、つまり一行が四句で二十字、それが二十行ですから、四百字の偈文が説かれているのです。すなわち、

「唯願不為慮 (唯願わくは 慮 いしたもう為からず)」(同 三七五[㊦])
から始まって、

「発如是誓言 仏自知我心 (是の如き誓言を発す 仏自ら我が心を知ろしめすらむ)」
(同 三七八[㊦])

の御文までが二十行の偈であります。

これは、法華経の虚空会こくうえにおいて八十万億那由他の菩薩が、仏滅後に三類の強敵ごうてきによる大難に耐えて法華経を弘通することを、異口同音に誓った御文であります。

この三類の強敵とは、第一が俗衆増上慢で、法華経の行者あつくめりを悪口罵詈したり、あるいは刀杖とうじょうの難を加えたりする、仏法に無知な在俗の人々のことであります。

第二の道門増上慢とは、邪宗の僧侶のことを言い、慢心が盛んで、邪智に富んだ者達のことです。

そして、第三が僭聖せんしょう増上慢と言い、表面上は聖者のように装って社会的に尊敬を集めているけれども、内面では利欲に執し、悪心を懐いて、法華経の行者おんしつを怨嫉する僧侶のことです。大聖人様の御在世当時では、権力を利用して大聖人様を流罪あるいは死罪にしようとした極楽寺良観などが、この僭聖増上慢に当たります。

このような三類の強敵による様々な大難を忍んで法華経を弘通することを、異口同音に誓ったのが、勸持品の二十行の偈文であります。

末法こんじ今時におきましては、『開目抄』のなかに、

「日蓮一人これをよめり」(御書 五四一[㊦])

とおっしゃっておられますように、大聖人様は三類の強敵が説かれる二十行の偈を、身口意しんくういの三業で読まれたのであります。例えば、小松原の法難たつのくちや竜口の法難、あるいは伊豆・伊東の法難など、たくさんの法難がありますが、このような未曾有の大難を受けながら、大聖人様は末法の御本仏としての境地を開顕あそばされたのです。ですから「日蓮一人これをよめり」と示されたように、三類の強敵を身口意の三業にわたってお読み

あそばされたのは、御本仏である大聖人様お一人なのであります。

このように述べられたあと、この『寂日房御書』には、

「日蓮となの事自解仏乗とも云ひつべし」（同 一三九三[㊦]）

と、日蓮大聖人様のお名乗りについておっしゃっております。

「自解仏乗」というのは、師匠から教えを受けることなく、自ら仏の境界を悟ることを言います。そして、大聖人様は「日蓮」と名乗ることは自解仏乗であると仰せられ、日蓮とお名乗りになられた所以をここで明かされているのであります。

そして、神力品の、

「日月の光明の 能く諸の幽冥を除くが如く 斯の人世間に行じて 能く衆生の闇を滅す」（法華經 五一六[㊦]）

との御文を引かれて、

「此の文の心よくよく案じさせ給へ。『斯人行世間』の五つの文字は、上行菩薩末法の始めの五百年に出現して、南無妙法蓮華經の五字の光明をさしだして、無明煩惱の闇をてらすべしと云ふ事なり。日蓮等此の上行菩薩の御使ひとして、日本国の一切衆生に法華經をうけたもてと勧めしは是なり」（御書 一三九三[㊦]）

とおっしゃっているのであります。

つまり、神力品の「日月の光明の 能く諸の幽冥を除くが如く」というのは、太陽と月の光が種々の暗闇を照らして明るくするように、という意味であります。そして、大聖人様は「斯の人世間に行じて 能く衆生の闇を滅す」との御文こそ、末法に上行菩薩、すなわち日蓮大聖人様が出現されることを釈尊が予証されたものであり、大聖人様はその上行菩薩の再誕として末法に御出現あそばされたのであります。

もちろん、上行菩薩としてのお立場は、あくまでも外用のお姿であって、内証深秘の辺から拝すれば、大聖人様は久遠元初自受用報身如来の再誕であります。

このことにつきましては、総本山第二十六世日寛上人が『文底秘沈抄』に、

「若し外用の浅近に拠れば上行の再誕日蓮なり。若し内証の深秘に拠れば本地自受用の再誕日蓮なり。故に知んぬ、本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」

（六卷抄 四九[㊦]）

と仰せられております。

すなわち大聖人様は、教相の上では上行菩薩として、たしかに法華經の神力品で釈尊から結要付嘱を受けました。けれども、さらに奥深い内証深秘の上から拝すれば、法華經神力品における釈尊から上行菩薩へと付嘱せられた儀式は、本来、久遠元初自受用報身如来であられる御本仏大聖人様が、釈尊の寿量品における久遠の仏寿を開顕する時の助けとして、本化の菩薩としてその姿を示され、かつまた末法弘通の付嘱を受けて末法に御出現あそばされることを予証されることであつたのであります。

よって、法華經に現れた上行菩薩は仮りの姿でありまして、久遠の本仏大聖人様が仏法付嘱の上から、過去に上行菩薩として御出現あそばされたのであります。

すなわち、今末法は、釈尊の説かれた文上の法華経では既に一切衆生の良薬とはならず、久遠元初の御本仏の御出現と、その御本仏の説かれる教えによって、末法の本末有善の衆生の成仏得道が、初めてかなえられるのであります。

したがって『高橋入道殿御返事』には、

「末法に入りなば迦葉・阿難等、文殊・弥勒菩薩等、薬王・観音等のゆづられしところの小乗経・大乘経並びに法華経は、文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず。所謂病は重し薬はあさし。其の時上行菩薩出現して妙法蓮華経の五字を一閻浮提の一切衆生にさづくべし」(御書 八八七)

と仰せられているのであります。

さらにまた『上野殿御返事』には、

「今、末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし。但南無妙法蓮華経なるべし」(同一二一九)

と仰せであります。

要約して言いますと、釈尊より付嘱を受け、今、大聖人様が所持あそばされるところの妙法は、法華経の題号としての妙法五字ではなく、久遠の本法たる妙法五字であります。まさしく、それは三大秘法の随一、本門の本尊のことであります。

この妙法五字は、釈尊をはじめ三世諸仏の成仏得道の根本の法であり、三世にわたって一切衆生を救済する根源の法なのであります。すなわち、久遠の本法たる妙法五字というのは人即法・法即人の妙法蓮華経にして、人に約せば久遠元初自受用報身如来の再誕、末法御出現の御本仏日蓮大聖人様であり、法に約せば久遠元初の妙法そのものであります。

されば、この日蓮の弟子檀那となった上は、日蓮と同じように法華経を流布すべきであり、自身も必ず成仏すると励まされているのが、この『寂日房御書』の概略であります。

以上、『寂日房御書』の内容を簡略に申し上げた上で、先程拝読いたしました本文に入ります。

初めに「昨日は人の上、今日は我が身の上なり。花さけばこのみなり、よめのしうとめになる事候ぞ。信心をこたらずして南無妙法蓮華経と唱へ給ふべし」とお示しであります。この御文の前を拝しますと、このようにあります。

「法華経は後生の恥を隠す衣である。法華経薬王菩薩本事品のなかには『裸者が衣を得たようなものである』と記されている。この御本尊こそ、冥途の恥を隠す衣装であるから、よくよく信心に励むべきである。夫の肌を隠そうとしない妻がいるだろうか。子供の寒さを哀れと思わない親がいるだろうか。釈尊と法華経は、妻と親のようなものである。日蓮に供養し、身を助けてくださることは、私の今生の恥を隠してくださる人だから、後生は日蓮があなただの恥を隠して差し上げましょう」(同一三九四取意)

という意味のことをおっしゃったあと、先程拝読した本文に入って「昨日は人の上、今日は我が身の上なり。花さけばこのみなり、よめのしうとめになる事候ぞ。信心をこたらずして南無妙法蓮華經と唱へ給ふべし」と仰せられているのであります。

つまり、この御文は今日、日蓮を供養された功德は、後日、必ずあなたの上に還ります。花が咲けば必ず実がなり、嫁はやがて姑になることは疑いないことである。だから、信心を怠らずに南無妙法蓮華經と唱えれば、即身成仏は疑いないとおっしゃっているのであります。

この御文から拝せられることは、まさしく我々の信心は不断の信心、絶え間なき信心が大事であることをお教えになっているのであります。

「功德」ということをよく言いますけれども、その功德にふさわしい信心がなければ、功德は頂けないのであります。何事も因果応報でありますから、因なくして果を求めても、それは無理であります。やはり、信心ということが一番の根本になってくるわけです。

皆さん方のなかには、そういう方はいないと思えますけれども、「一生懸命に信心に励んでいるけれども、なかなか功德を頂けない」とか「御利益を頂いてない」という方がいたならば、たいてい、そういう人は一生懸命にやっていませんね。やはり、一生懸命にやっていたら、それなりの功德というものは必ずあるのです。これはもう、因果の理法の上から歴然としているのです。ですから、そこのところを、もうひと踏ん張り、やっていくのが大事です。

例えば「やっている、やっている」と言っても、少しでも違った信心の形があると、それはだめなのです。極端な話が、折伏をしない信心、これはだめですよ。大聖人様の信心は、

「自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり」(同一五九五)

と仰せです。だから、「私は一生懸命、お題目を唱えているのですが…」と言うだけで、折伏を忘れていてはだめですね。

これはやはり、自行と化他の二つを実践してこそ、初めて大聖人様の御意にかなうわけです。だから、自分で何が足りないのかをよく考えたら判ります。「これだけお題目を唱えているのに…」と言うのだったら、その分、また折伏をしたならば、必ず良くなります。

信心というのは、ここなのです。大聖人様の教えは、あくまで自行と化他なのです。つまり、自分だけの幸せを求めるだけではだめなのです。自分も幸せになるし、他の人も幸せにしていく、これが大事です。そのために大聖人様は、この世に出現されたわけです。なにも、末法に出現して、自分勝手に法を説いて、それで満足されているわけではありません。人々を成仏に導かれるために、つまり広宣流布のために、仏様は法をお説きになられたわけですから、そのお心を私達が酌んでいかなければ、大聖人様の弟子檀那と言ってみても、これは本当のものとはなりません。そこが大事なのです。

特に今、宗門は明年の日興上人御生誕七百七十年、また平成三十三年の大聖人御聖誕八百年を期して、みんなで折伏していこう、広宣流布の戦いをしていこうということが主題になっているわけですから、そこから外れた信心をしていたのでは、やはり、少し違う信心になってしまいます。

だから、もし「いくらやっても、だめなんだよな」と思っている人がいたならば、その人は折伏をなささい。自分だけの信心ではなくして、多くの人を救っていくところの折伏をなささい。そうすれば必ず変わります。これが自行化他にわたる信心であります。

「題目とは二意有り。所謂^{いわゆる}正像と末法となり。正法には天親菩薩・竜樹菩薩、題目を唱へさせ給ひしかども、自行計りにして唱へてさて止みぬ。像法には南岳・天台等は南無妙法蓮華経と唱へ給ひて、自行の為にして広く化他の為に説かず。是^{これ}理行の題目なり。末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」(同 一五九四)

とあるように、自行ばかりではなく、化他が必要なのであります。このことを、しっかりと認識していただきたいと思ひます。

つまり、いかに不断の信心が大切であるかということが、ここに示されているのでありますから、今申し上げたように自分自身の成仏を願うならば、大きな功德を頂けるような信心、それはまさしく自行化他にわたる信心が肝要なのであります。

誓願が達成されるか、されないかは、結局は我々の努力次第であります。「一念、岩をも通す」という故事がありますが、まさにその通りでありまして、固い決意と信念と、そしてもう一つ、実践行動、これをもって、一致団結して事に当たれば、誓願は必ず達成することができるのであります。

これは、なにも仏法に限ることではありません。世法においても、全く同じです。仏法即世法、世法即仏法ですから、全く同じ原理です。やはり努力を怠った者は、幸せは掴めません。

これは、ある人の言葉でありますけれども、「苦しいから逃げるのではない。逃げるから苦しくなるのだ」という言葉があるのです。これは、折伏でも、なんでもそうです。逃げるから、だめなのです。苦しいからといって逃げたのでは、だめなのです。逃げると、苦しくなるのです。だから、逃げない。絶対に逃げない。踏みとどまっていくことが大事なのです。

なんでも、そうです。信心だけに限らず、我々の生活全般にわたって、どんなことがあっても逃げない。そういう挑戦の力、戦う力、それを一人ひとりが持って戦ってごらんください。折伏でもなんでも全部、同じです。絶対に逃げない。今、言った通り、苦しいから逃げるのではなくして、逃げるから苦しくなるのです。だから、逃げなければ、必ず勝利できるということでありませぬ。

そういう意味では、一人ひとりが、敢然として大折伏戦に臨んで、必ず誓願を達成していただきたいと思ひます。

次に、十二番に行きます。

12 四条金吾殿御返事

いかに日蓮祈いのり申すとも、不信ならば、ぬれたるほくちに火濡をうちかくるがごとくなるべし。はげみをなして強盛ごうじょう しんりき 出に信力をいだし給ふべし。(御書一四〇七ぎ一四行目)

この『四条金吾殿御返事』は、弘安二（一二七九）年十月二十三日、大聖人様の御年五十八歳の時に、四条金吾殿に与えられた御書であります。

本抄は、別名を『剣形書けんぎょうしょ』とも言います。これは四条金吾殿が出世ねたを妬む者から命を狙われるのでありますが、無事にその難を避けることができたこと、その状況を大聖人様に御報告いたしました。その返事が本抄であります。すなわち、強盛の信力を出せば、いかなる敵も打ち破ることができるとして、どんな兵法ひょうほうよりも法華経の兵法を用いるように指南あそばされているのが、この御書であります。

四条金吾殿につきましては、皆さん方もよく御講などで色々とお聞きになっていると思いますけれども、本名は四条中務なかつかさ三郎左衛門尉頼基よりもとと言いまして、北条氏の支族である江馬家に仕えていた武士であります。そして、その奥さんが日眼女にちげんによであります。

この「金吾」という名前は、中国の漢代に宮門の警護をつかさどった武官である「執金吾しつ きんご」の略でありまして、言うならば皇居の諸門の護衛とか、出入りの許可ぎょうこう、行幸の供奉ぐぶなどを行った役職であります。

四条金吾殿は武術にたいへん優れておりまして、また同時に医学にも通達しておりました。建長八（一二五六）年、二十七歳の時に、池上兄弟や工藤吉隆殿などと前後して、大聖人様に帰依したと言われております。以来、大聖人様の外護に努めまして、文永八（一二七一）年の竜口の法難の時には、殉死の覚悟で大聖人様のお供をしました。このことは『種々御振舞御書』のなかに詳しく出ておりますので、おうちにお帰りになりましたならば、是非、拝読しておいていただきたいと思います。

また、文永九年には人本尊開頭の書である『開目抄』二巻を頂いております。さらにまた、様々な激励を大聖人様から受けております。

しかし、極楽寺良観という者が鎌倉におりまして、主人の江馬光時がその良観の信奉者だったのです。四条金吾殿がその主人を折伏したところ、領地を減らされるなどの難が襲ってきたのであります。

また建治三（一二七七）年には、鎌倉の桑ヶ谷やつに天台宗の僧侶で竜象という者がいたのですが、その竜象の法座で、大聖人様の弟子の三位房が、竜象と問答をしたのです。そして、その者を徹底して破折したわけでありましてけれども、そのことから同僚ざんげんに讒言されたのです。

讒言というのは、人を陥れるために事実を曲げ、あるいは偽^{いつわ}って、目上の人に悪く言うことです。ですから、四條金吾殿のことを快く思っていない者が、主人の江馬氏に悪く告げたわけでありませう。その結果、四條金吾殿は主人の不興を買ひまして、所領を没収されそうになったのであります。

実は、四條金吾殿はその法座に同席していなかったのでありますけれども、竜象達が江馬氏に対して、四條金吾殿達が徒党^{ろうぜき}を組んで、武器を持って狼籍を働き、法座を乱したと讒言をしたのであります。そこで、江馬氏は怒って、書を下して、この件について詰問^{きつもん}したのです。

大聖人様はこれを聞かれて、その冤罪^{えんざい}を晴らすために、四條金吾殿に代わって『頼基陳状^{したた}』を認められ、江馬氏に提出されたのであります。

この陳状というのは、原告の訴状に対して、被告が出す答弁書のことを言います。この時は、四條金吾殿が謂れなき中傷、讒言によって陥れられたということから、大聖人様が四條金吾殿に代わって陳状を出されたのであります。

このことから、大聖人様の御信賴^{うかが}がいかに厚かったかが察せられるのでありまして、たいへん信心の強盛な方であったことが窺い知れます。

その内容は、最初に三位房と竜象の法論の実状を述べて、讒人達、つまり訴えた者達の言は全くうそであるとお示しになっております。そして、極楽寺良観と竜象の所行を厳しく批判されて、江馬氏の二人に対する見解の誤り^{ただ}を糾され、四條金吾殿こそ真の忠臣であるとおっしゃっております。さらに、真言、禅、念仏、律宗等の邪義を破折されて、最後に重ねて事件の真相究明を請われているのであります。

その結果、翌年の建治四年には主人の勘気が解けまして、かえって四條金吾殿は所領も加増されて、さらに主人の深い信任を得るようになったということでもあります。

また、四條金吾殿を讒訴した、つまりうそ偽りを言って訴えた竜象は、建治三年九月に認められた『崇峻天皇御書』に、

「彼等が柱とたのむ竜象すでにたうれぬ。和讒^{わざん}せし人も又其の病^そにをかされぬ」(御書 一一七一頁)

とありますように、竜象は天罰^{こうむ}を被り、讒言したのちしばらくして病にかかって倒れたのであります。さらにまた、「和讒せし人」というのは、つまり竜象と一緒に讒言、中傷、悪口をした人達も、同様に病に倒れてしまったと示されており、はっきりと現証が出たとおっしゃっているのであります。

また、文永八年九月十二日の竜口の法難の時には、四條金吾殿は大聖人様が竜口の刑場に連行されるとの知らせを聞いて兄弟と共に駆けつけ、刑場に向かわれる大聖人様の姿を見て馬の轡^{くつわ}に取りすがり、殉死の覚悟^{はだし}で裸足のままに大聖人様のお供をしていったのであります。それほど、純真な方だったのであります。

したがって、大聖人様は後年、弘安元(一二七八)年十月の『四條金吾殿御返事』に、「去ぬる文永八年の九月十二日の子丑の時、日蓮が御勘気^{ねうし}をかほりし時、馬の口にと

りつきて鎌倉を出でて、さがみのえちに御ともありしが、一閻浮提第一の法華經の御かたうどにて有りしかば、梵天・帝釈もすてかねさせ給へるか」(同 一二八七㊦)と仰せられております。つまり、大聖人様が刑場に向かわれるのを見て、御自分も殉死する覚悟をもってお供をしていったことに対して、大聖人様は「一閻浮提第一の法華經の御かたうど」すなわち、味方であると仰せであります。したがって、一閻浮提第一の法華經の方人でありますから、「梵天・帝釈もすてかねさせ給へるか」つまり、捨て置くわけにはいかなかったのだとおっしゃっているのです。

さらに、弘安三年十月八日の『四条金吾殿御返事』には、竜口の法難において決死の覚悟をもって大聖人様のお供をしたことを、

「いつの世にか思ひ忘るべき」(同 一五〇一㊦)

とおっしゃっておられます。

また、文永九(一二七二)年五月の『四条金吾殿御返事』には、

「然るに貴辺法華經の行者となり、結句大難にもあひ、日蓮をもたすけ給ふ事、法師品の文に『遣化四衆・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷』と説き給ふ。此の中の優婆塞とは貴辺の事にあらずんばたれをかさゝむ」(同 五九八㊦)

と仰せになっています。

このなかの「遣化四衆」というのは、仏様が比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷という變化の四衆を遣わすということで、比丘というのはお坊さん、比丘尼というのは尼さん、それから優婆塞というのは男性の御信者さんで、優婆夷というのは女性の御信者さんのことです。つまり、このような色々な方を差し遣わして、末法の法華經の行者を守護することが説かれております。そして竜口の法難の時には、四条金吾殿が大聖人様を必死の思いで守護されたことを褒められて、仏様から遣わされた變化の人とは、あなた四条金吾殿のことであるとおっしゃり、なお一層の自覚と成長を促しておられるのであります。

また、四条金吾殿につきまして、建治四(一二七八)年の『四条金吾殿御書』には、

「円教房が来て言うのには、主君である江馬の四郎殿の御出仕のお供は二十四、五人いるが、そのなかで四条金吾は、背の高さといい、面魂つらだましいといい、また乗っている馬や従えている下人までも、中務左衛門尉なかつかさが第一である。『ああ、彼こそ男だ、男だ』と、鎌倉の童子わらべが辻で言い合っていたと語っていた」(同 一一九七㊦取意)

とあります。この文面から拝しますと、四条金吾殿は美丈夫で、今流に言えばイケメンだったようであります。さらに、背も高くて、面魂もしっかりしていて、威風堂々としたところがあったようです。

そのように大聖人様は、のちにおいても四条金吾殿のことを褒めておられるのであります。

四条金吾殿に関する話が長くなりましたが、それでは本文に入ります。

初めに「いかに日蓮祈いのり申すとも、不信ならば、ぬれたるほくちに火火口をうちかくるがごとくなるべし。はげみをなして強盛ごうじょうに信力しんりきをいだし給ふべし」と仰せであります。

これは、御本尊への絶対的確信を持って、いよいよ信心に励むように御教示あそばされている御文であります。

通釈すると「日蓮が、あなたのことをいかに祈ったとしても、あなたがこの妙法を信じなければ、濡れた火口ほくちに火を打ち掛けるようなもので、無駄になってしまいます。されば、なお一層、励んで、強盛な信力を出だしていきなさい」と仰せられております。

我々の信心も同様でありまして、信力・行力が大切です。既に、御本尊様には仏力と法力が具わっています。だから、私達が信力・行力を出せば、四力が成就して、物事がかなうわけであります。

既に御本尊様の仏力・法力は、まさに歴然とそこに存在しているわけでありますから、あとは我々が信力・行力を奮い起こして広布のための戦いをしていく、これがいわゆる四力成就の一番の根本になるのであります。

また、この御文のあとには、

「すぎし存命不思議とおもはせ給へ。なにの兵法ひょうほうよりも法華經の兵法持をもちひ給ふべし」(同 一四〇七頁)

とおっしゃっているのです。すなわち「金吾が讒訴され、それによって苦境に陥ったけれども、無事に助かったということは、ひとえに妙法蓮華經の不思議な功德力によるものである。いかなる兵法よりも法華經の兵法、すなわち信心を用いていきなさい」とおっしゃっているのであります。つまり「これからもしっかりと御本尊を受持して、何事も信心で乗りきっていきなさい。強盛の信力を出せば、いかなる敵も打ち破ることができますよ」と仰せになっているのであります。

これはまさに我々の普段の信心においても大事で、いかなる時でも戒壇の大御本尊様の広大無辺なる功德を信じ奉り、無二に信じきっていくところに、四条金吾殿がたび重なる難を乗りきってきた源があることを知らなければなりません。つまり、御本尊様に対する絶対信を常に自分自身の心のなかに誓っていくということです。これが信心の根本であり、それを忘れてしまってはならないのであります。

次に、十三番目の御文に入ります。

13 中興入道御消息

去りぬる幼子のむすめ御前の十三年に、丈六のそとばをたて、其の面に南無妙法蓮華經の七字を顯はしてをはしませば、北風吹けば南海のいろくづ、其の風にあたりて大海の苦をはなれ、東風きたれば西山の鳥鹿、其の風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生まれん。況んやかのそとばに隨喜をなし、手をふれ眼に見まいらせ候人類をや。過去の父母も彼のそとばの功德によりて、天の日月の如く浄土をてらし、孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて、後生には父母とともに靈山浄土にまいり給はん事、水すめば月うつり、つゞみをうてば

書
ひゞきのあるがごとしとをぼしめし候へ等云云。(御書一四三四^ナ五行目)

この『中興入道御消息』は、弘安二（一二七九）年十一月三十日にお認めあそばされた御書であります。

中興入道は佐渡の方でありまして、中興入道殿の女房が佐渡からわざわざ夫の身延登山に託して数々の御供養を奉ったことから、中興入道夫妻に与えられた御消息であります。

本抄は一往、題名は『中興入道御消息』となっておりますけれども、その最後の所を見ますと、宛名が、

「中興入道殿女房」（御書 一四三四^ナ）

となっております。しかし、文中を見ますと、

「貴辺は故次郎入道殿の御子にてをはするなり。御前は又よめ^嫁なり」（同^ナ）

とあり、ここに「貴辺」とあるのは次郎入道殿の子供であり、女房殿の御主人である中興入道のこと、「御前は又よめなり」とあるのは女房殿のことです。題名を見ると御主人の中興入道に、また宛名を見ると中興入道の奥さんに与えられたお手紙のようでもありますけれども、実際は御夫婦の両方に与えられた御消息のように思われます。

御主人の中興入道は中興次郎入道の子で、現在も新潟県佐渡市に中興という地名が残っており、そこに住んでおられましたので、この呼び名があるわけです。

こういうことは、今でもあります。新宿のおじさんとか、静岡のおばさんとか、土地の名前で呼ぶ風習がありますね。

南条時光殿もそうです。この総本山大石寺のある地域を昔は上野と言ったので、上野殿と言ったら南条時光殿のことを指すわけです。ここは昔、静岡県富士郡上野村と言っていました。今はもう、上野を冠するものは学校などだけで、ごく一部でしか使われておりません。けれども、南条さんはこの領主でありましたから、上野殿と地名で呼ばれていたのです。中興入道殿も、これと同じでありまして、こういうことが昔は、よくあったのであります。

そのお父さんである中興次郎入道殿は地元の人望を集めた人でありまして、初めは念仏の信者でありましたが、のちに流罪中の大聖人様に会って法華経に帰依し、以後、大聖人様の外護の任を果たされた方です。また、中興次郎入道殿が亡くなったのちには、その子供の中興入道も、まじめな信仰に励んだことが知られております。

この御書を見ますと、初めに日本における仏教伝来および流布に触れ、次いで念仏や真言等の邪義が弘まり、正法の行者である大聖人様を佐渡へ流罪する等の迫害を加えていることなどが示されております。このなかでは、中興夫妻の在島中の外護の志を感謝されて一家の信心を^{たた}称えられるとともに、大聖人様が自ら日本第一の^{ちゅう}忠の者であることを示され、最後に父の中興次郎入道の志を継いで大聖人様に対して供養されたことを

褒められ、併せて塔婆供養に寄せて法華經による追善供養の功德を明かされております。

さて、本文に入りますと、まず「去りぬる幼子のむすめ御前の十三年に、丈六のそとばをたて、其の面に南無妙法蓮華經の七字を顕はしてをはしませば、北風吹けば南海のいろくづ、其の風にあたりて大海の苦をはなれ、東風きたれば西山の鳥鹿、其の風を身にふれて畜生道をまぬかれて都率の内院に生まれん」とお示しであります。この御文以下は、中興入道の娘の第十三回忌の塔婆供養に寄せて、その功德を述べて、供養の深い志を褒められているところでもあります。

ここに「丈六のそとば」とありますが、「丈六」とは一丈六尺の長さですから、相当、背の高い卒塔婆でありますけれども、卒塔婆というのは元々、古代インドで土饅頭の形、つまり、お饅頭のように土を盛り上げた墓を指すと言われております。のちには、仏様や阿羅漢などの記念碑として、遺骨とか遺髪などを埋めて構築するようになったのであります。さらに後年、死者の追善供養のために、今のような板形のものになりました。墓の裏に立てて供養するようになったのであります。

その卒塔婆の功德について述べられているのが、この御文であります。解りやすく言いますと「卒塔婆の面に南無妙法蓮華經の七字を認めて立てると、北風が吹いて塔婆に触れ、その風に当たった南海の魚達は大海の苦を離れ、東風が吹けば西の山の鳥や鹿は、その風を身に受けて畜生界をまぬかれて、都率の内院に生まれるであろう」とおっしゃっております。

この「都率の内院」というのは、都率天には内外の二院がありまして、内院は将来、仏と成るべき菩薩が最後の生を過ごす所でありまして、現在は弥勒菩薩が住んでいるとされております。また、外院は天人の住処とされてありまして、ここで「都率の内院に生まれん」とおっしゃっているのは、妙法の風に触れた鳥や獣達は畜生道を逃れて、必ず将来、仏に成ること、つまり成仏することができるであろうと仰せられているのであります。

したがって、その次に「況んやかのそとばに随喜をなし、手をふれ眼に見まいらせ候人類をや。過去の父母も彼のそとばの功德によりて、天の日月の如く浄土をてらし、孝養の人並びに妻子は現世には寿を百二十年持ちて、後生には父母とともに靈山浄土にまいり給はん事、水すめば月うつり、つづみをうてばひゞきのあるがごとしとをぼしめし候へ等云云」とおっしゃっております。すなわち「妙法蓮華經と認められた卒塔婆に触れた風に当たった鳥や獣ですら、畜生道をまぬかれることができるのであるから、まして、かの卒塔婆を立てて、随喜渴仰して手に触れ、眼に見る人々は、計り知れない大きな功德を得ることができる。されば、今は亡き両親も、この卒塔婆の功德によって、天の日月が明々と道を照らすように、浄土への道を照らされていることでしょう。また、かくの如き孝養を尽くされた中興殿御自身ならびに妻子は、現世には百二十年の長寿を保ち、後生には父母と共に靈山浄土に参ることができるでしょう。それはあたかも、水が澄めば必ず月が映り、鼓を打てば必ず響きがあるようなものであると思し召しなさ

い」と塔婆供養の功德について述べられ、その供養の深い志を称嘆しょうたんされているのであります。

また、この卒塔婆につきましては、『草木成仏口決』に、

「我等衆生死する時塔婆を立て開眼供養するは、死の成仏くけつにして草木成仏なり」（同五二二頁）

と示されております。まさに大聖人様は、法華經の題目を認めた塔婆をもって回向することの功德の大なることを、ここではっきりと御教示あそばされているわけでありませぬ。

しかるところ、創価学会は塔婆供養について、色々と難癖なんくせをつけていますね。なかには「日蓮大聖人は塔婆を建立されなかつた」と言っている者もいるようです。

しかし、この御文を拝せば解るように、創価学会の主張は全く、宗門に対する難癖以外の何ものでもないのであります。このように、御書に明らかに卒塔婆の功德についておっしゃっているにもかかわらず、彼らは自分達に都合が悪いものは、たとえ大聖人様の御金言があろうとも、平気で否定するのです。これが学会の姿です。だから、おかしくなってしまうのです。

こういうことが、言うなれば増上慢なのです。世の中で一番救われないのが増上慢です。これは救えません。その増上慢の最たるものが創価学会であり、池田大作です。

やはり我々は、御本尊様の前にある時は、謙虚でなければなりません。常に謙虚な志を持って、御本尊様を拝していくことが大切です。この謙虚さがなくなった時には、みんなおかしくなってしまう。増上慢から全部、大きな誤りを犯してしまうのです。

ですから、我々の信心も、御本尊様の御前においては常に謙虚であることが、まことに大切だと思ひます。そうすることによって、おのずからその人の人格も磨かれて、人格者として謙虚になっていくのです。このことを忘れないでいただきたいと思ひます。

ただし、折伏の時はきちんと**言うべきこと**を言わなければいけませんよ。謙虚過ぎてしまつて、何も言わないというのは、法に外れますからだめです。この辺の区分けはしっかりと、折伏をしていきましょう。是非、そのようにお願いをいたします。

それでは、次に十四番目の御書を拝読します。

14 右衛門大夫殿御返事

当今は末法の始めの五百年に当たりて候。かゝる時刻に上行菩薩御出現あつて、南無妙法蓮華經の五字を日本国の一切衆生にさづけ給ふべきよし經文分明なり。又流罪死罪るざいに行なはるべきよし明らかなり。日蓮は上行菩薩の御使ひにも似たり、此の法門を弘むる故に。神力品に云はく「日月の光明の能く諸の幽冥にちがつ こうみやう よ もるもろ ゆうみやうを除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇やみを滅す」等云云。此の經文に斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰とか思し食す、上行菩薩の再誕の人なるべしと覺えた

り。(御書一四三五^ナ四行目)

当抄は、弘安二（一二七九）年十二月三日、大聖人様の御年五十八歳の時、身延より池上宗仲に与えられた御消息であります。

対告衆の池上右衛門大夫宗仲は、武蔵国池上（現在の東京都大田区）に住んでいた鎌倉幕府の作事奉行・池上左衛門大夫康光の長男でありまして、この人のお母さんは六老僧の一人である日朗の姉であります。また、宗仲の弟は兵衛志宗長^{ひょうえさかんむねなが}と言ひ、この二人は大聖人様より『兄弟抄』などの御書を賜り、共に信心に励んでいたのであります。

このお二人の名前についてですが、普通、長男には「○長」と付けて、二男のほうに「○仲」と付ける例が多いかと思ひます。ところが、池上兄弟の場合は、長男が宗仲、二男が宗長^{なが}になっていて、少し混乱しやすいかと思ひますので、老婆心ながら申し上げておく次第です。

さて、お兄さんの宗仲は、建長八（一二五六）年ごろに、四条金吾殿や工藤吉隆殿などと共に入信したと言われております。また、弟の宗長の入信も、そのころではないかと言われております。

しかし、父の康光は極楽寺良観の熱心な信者であったために、兄弟の信仰に猛反対し、兄弟の法華信仰を退転させようとして、様々な画策をしたのであります。そして、文永十二（一二七五）年には、宗仲は父・康光より一回目の勘当^{かんだう}を受けるわけであります。

当時の勘当というのは、現代と違ひまして、たいへん厳しい意味を持っておりました。それは、まず血縁関係を断つというだけではなく、経済的な保証を奪い取るほか、社会的にも破滅を意味するようなものだったのです。宗仲は、父の康光から、そのような厳しい処置を受けたのでありますけれども、信心でそれを乗りきっていったのであります。

特に、大聖人様は建治二（一二七六）年四月に『兄弟抄』を認められまして、兄弟や、両者の妻を励まされております。

その『兄弟抄』を拝しますと、初めに法華経が諸経のなかで最第一であることを述べたあと、次に信心をしていて難を受ける理由を、大聖人様は三つ挙げられております。すなわち、一つには過去世の様々な業因により、二つには諸天善神が法華経の行者を試みるために種々の姿となって現れ、色々な難を下すのだとおっしゃっています。そして、三つには第六天の魔王が父母や兄弟など、血縁関係のある人の身に入つて、悪知識となって信心を妨げると説かれているのです。

このなかにおられるかどうかは判りませんが、信心を始める時には、例えば御両親が猛烈に反対するとか、あるいは兄弟が猛烈に反対するとか、あるいは奥さんや御主人が反対するといった様々な形で、難を受けておられる方もいらっしゃるかと思うのです。もちろん、順調にずっと来ている方もいらっしゃるでしょうけれども、そういう難が色々あるのであります。

そういうことを、この『兄弟抄』のなかでおっしゃって、まさに池上兄弟が、特に長

男がお父さんから勘当されたことについて、世の中にはそういう色々な難を受けている方がいることを挙げられて、その難を乗り越えていくようにと、大聖人様が宗仲に対して激励されているのです。

その激励の結果、一回目の勘当は許されることとなりました。しかしながら、翌建治三年の十一月には、再び父より勘当を受けるわけです。しかも今度は、お兄さんよりは少し信心が弱かったと思われる弟の宗長に対しまして、お兄さんを外して家督を譲るといようなことを条件に、大聖人様の信仰を断ち切るように働きかけたのです。これは非常に厳しい意味がありました。

元々お父さんは極楽寺良観の檀那であり、良観は大聖人様に対して敵愾心てきがいを持っていますから、この時もまた良観が暗躍いたしまして、この兄弟の仲を裂いて、兄の宗仲の孤立を目論んで、色々な難癖をつけてきたのであります。

これに対して、大聖人様は『兵衛志殿御返事』(御書一一八二^〆)を送って、弟の宗長を教導されました。その結果、兄弟は結束して信心を守り、翌年の春ごろには宗仲の勘当が再び解かれることとなったのであります。しかも、そののち兄弟が心を合わせて父の康光を折伏し、大聖人様に帰依することになるのであります。

現在、東京の池上という所には本門寺が建っておりますけれども、ここは元々、池上兄弟の屋敷があった所で、大聖人様は弘安五(一二八二)年の九月に、身延山より常陸ひたちの湯に赴かれる途中でここにお立ち寄りになり、この池上の屋敷で御入滅あそばされたのであります。

いずれにいたしましても、この兄弟は様々な難を乗り越えることができたのであります。しかも今言ったように、第六天の魔王が父などの身に入り、そこにまた極楽寺良観のような、とんでもない者が入ってきて、悪知識となって信心を妨げる形があったわけですが、この兄弟は大聖人様の御教導によって乗り越えていかれたのであります。

次に、本文に入ります。

初めに「**当今は末法の始めの五百年に当たりて候**」とあります。

御承知の通り、末法というのは、仏滅後の年代を正法・像法・末法と大きく三つに分けたなかの一つであります。

大聖人様は『撰時抄』で、大集経の「五箇の五百歳」を依拠えきよといたしまして、正法千年、像法千年、末法万年とされています。すなわち『撰時抄』に、

「大集経に大覚世尊がっぞう、月蔵菩薩いづゆるに対して未来の時を定め給えり。所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固、次の五百年には禅定堅固けんご、次の五百年には読誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺堅固けんご、次の五百年には我が法の中に於て闘諍言訟とうじょうごんしょうして白法びやくほう隠没せん等云云」(御書 八三六^〆)

と仰せであります。

これを分けて見ますと、正法時代は解脱堅固の五百年と禅定堅固の五百年の、合わせて一千年です。次の像法時代は、読誦多聞堅固の五百年と多造塔寺堅固の五百年の、合

わせて一千年。そして、末法は鬪諍言訟・白法隱没ということであります。

このうち解脱堅固は、釈尊が亡くなってからまだ日が浅いので、仏道修行が盛んで、智慧を得て悟りを開く者が多かった時代であります。この時代には、インドでは迦葉^{かしょう}・阿難などが小乗教を説いて、大いに弘めたのであります。

次の禪定堅固は、衆生が大乗を修して禪定三昧に入り、心を静めて思惟の行に励んだ時代であります。この時期は、インドに馬鳴菩薩や竜樹菩薩などの方々が出られて権大乗教を弘め、衆生はそれを修行して禪定を保ったのであります。

像法時代に入りますと読誦多聞堅固、これは読んで字の如く、經典の読誦と説法を多く聞くことが中心になって行われた時代であります。

また、像法時代の後半の多造塔寺堅固は、これまた字の如く、寺院や仏塔の建立が多く行われた時代です。この期間には、人々は盛んに寺院や堂塔などを建立したのであり、仏道を求めて修行に励んだり、仏教の内容面を充実させるよりも、どちらかと言うと、外観とか形式を重んずるような時代となったわけであります。

そして、末法に入ると鬪諍堅固・白法隱没となります。これは、鬪諍堅固と言うぐらいですから、戒律を守らず、互いに自説に執着して争いごとが絶えない時代であります。

この「白法」とは釈尊の教えのことで、釈尊の教法である白法が隱没する時に、まさに法華經に予証せられた通り、久遠元初の御本仏である宗祖日蓮大聖人様が御出現あそばされ、南無妙法蓮華經の「大白法」を弘めて、末法本未有善の衆生を救済されるわけであります。

したがって釈尊は、この大白法が末法に流布することを予証せられておきまして、法華經藥王品には、

「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して、斷絶せしむること無けん」(法華經 五三九^ぢ)

と説かれております。つまり、釈尊の教えは正法時代と像法時代の二千年で終わるが、

「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して、斷絶」することがない。

「後の五百歳の中」とあるのは末法にということ、末法に大聖人様が御出現あそばされて妙法蓮華經が説かれることを、この御文のなかで既に予証されているのであります。

これについて、天台大師も、

「後五百歳遠く妙道に沾はん」(御書 二五五^ぢ等)

と述べられております。「妙道」とは南無妙法蓮華經の道でありますから、妙法蓮華經が後五百歳の末法に流布すると、天台大師も予証しているのであります。

天台大師は、末法に大聖人様が御出現になり、妙法を説かれることを御存じなのですが、^{ないがんれいねん}「内鑑冷然」と言ひまして、

「天台・妙樂・伝教等は内には鑑み給へども、故こそあるらめ^{ことば}言には出だし給はず」
(同 一三八七^ぢ)

と仰せのように、御承知だったけれども、それを言葉には出されなかったのです。つま

り、末法は大聖人様が御出現される時代であり、御自分のお役目ではないから、その領域を侵すことはできないのです。そのために、御自分では法を説かれることなく、「後五百歳遠く妙道に沾はん」と、妙法蓮華経が後五百歳の末法に流布することを述べられているのであります。

さらに、このことを受けて、伝教大師は、

「正像やや稍過ぎ已おはって末法はなは太だ近きに有り。法華一乗の機、今正しく是其の時なり」
(同 二五六ぎ等)

と述べられています。つまり、天台大師や伝教大師は像法時代の方々ですから、正法・像法の二千年がもうすぐ過ぎ終わろうとし、末法がすぐ近くまで来ていると示されたあと、末法は南無妙法蓮華経の大白法が流布する時であることを「法華一乗の機、今正しく是其の時なり」とおっしゃっているのです。つまり、末法に御本仏が御出現されて、妙法を説かれるということは、釈尊も、あるいは天台大師や伝教大師も、このように予証せられているのであります。

次に「かゝる時刻に上行菩薩御出現あって、南無妙法蓮華経の五字を日本国の一切衆生に授さづけ給ふべきよし経文ふんみょう分明るざいなり。又流罪死罪に行なはるべきよし明らかなり」と仰せです。

「かゝる時刻」というのは、もちろん末法であります。つまり、末法に上行菩薩が出現せられて、法華経本門の肝心たる南無妙法蓮華経の五字を日本国の一切衆生に授けるということは、既に経文に明らかに説かれているとおっしゃっているのであります。

先程も申し上げましたけれども、釈尊は法華経の涌出品におきまして、迹化・他方の菩薩達が、釈尊の滅後の娑婆世界の弘通を申し出られたことに対して、

「止みね、善男子」(法華経 四〇八ぎ)

と、その人達を押し止めて「お待ちなさい」とおっしゃったのです。そして、大地の底から上行菩薩等の四菩薩を上首とする六万恒河沙の本化地涌の菩薩を呼び出して、如来寿量品を説いたのち、如来神力品において法華経の肝要を四句の要法くくに括って付嘱し、末法の弘通を託されたのであります。

大聖人様は、その上行菩薩の再誕として末法に御出現あそばされましたが、先程も言いました通り、上行菩薩としてのお立場はあくまで外用のお姿でありまして、内証深秘の上から拝せば、大聖人様は久遠元初自受用報身如来の御本仏にましますのであります。そのことを解りやすくおっしゃっておられるのが、日寛上人の『文底秘沈抄』でありまして、

「若し外用の浅近せんこんに抛れば上行の再誕日蓮なり。若し内証の深秘に抛れば本地自受用の再誕日蓮なり。故に知んぬ、本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」
(六卷抄 四九ぎ)

と、はっきりと御指南あそばされております。

つまり、滅後末法において外用上行菩薩、内証久遠元初の御本仏大聖人様の御出現と、

その御本仏の説かれる教法、すなわち本因下種の妙法蓮華經によって、初めて末法本末有善の衆生の成仏得道がかなえられると、明らかに仰せられているのであります。

また、末法出現の上行菩薩、すなわち内証久遠元初の御本仏大聖人様が、大法弘通のために必ず流罪、死罪等の大きな難に値うということも、また經文には明らかであるとおっしゃっております。

すなわち、勸持品第十三には「二十行の偈」が説かれ、釈尊滅後の法華經の行者を様々な形で難が襲うこと、特に俗衆増上慢・道門増上慢・僭聖増上慢という三類の強敵が出現して、法華經の行者に対して様々な難を及ぼすことが説かれております。このことが、大聖人様が法華經の行者であることの一つの証明になるわけです。

つまり、大聖人様は竜口の法難や小松原の法難など、様々な法難に値われますが、それは釈尊が三千年の昔に予証せられていることなのです。つまり法華經の、特に勸持品のなかではっきりと三類の強敵が現れることが予証せられており、その予証されている通りに、大聖人様は様々な難に値われたのです。

逆に言うと、もし大聖人様が御出現しなかったならば、お釈迦様はうそつきになってしまいます。つまり、大聖人様が主なのであり、御本仏大聖人様のお立場からすると、大聖人様が竜口の法難等の様々な御難に値われることは、法華經が不実でない、つまりうそではないことを証明しているのです。そこに大事な意味があるのです。

そして「日蓮は上行菩薩の御使ひにも似たり、此の法門を弘むる故に。神力品に云はく「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」等云云。此の經文に斯人行世間の五の文字の中の人の文字をば誰とか思し食す、上行菩薩の再誕の人なるべしと覚えたり」とお示しですが、これは先程も言いましたね。つまり、神力品に、

「日月の光明の 能く諸の幽冥を除くが如く 斯の人世間に行じて 能く衆生の闇を滅す」(法華經 五一六)

と説かれてありますが、この御文のなかの「斯の人」とは大聖人様のことをおっしゃっているのです。そして「斯の人世間に行じて 能く衆生の闇を滅す」と示されております。

この神力品の御文を大聖人様は引かれて、先程の『寂日房御書』に、

「此の文の心よくよく案じさせ給へ。『斯人行世間』の五つの文字は、上行菩薩末法の始めの五百年に出現して、南無妙法蓮華經の五字の光明をさしだして、無明煩惱の闇をてらすべしと云ふ事なり。日蓮等此の上行菩薩の御使ひとして、日本国の一切衆生に法華經をうけたもてと勧めしは是なり」(御書 一三九三)

とおっしゃっております。

さらに、日寛上人は『文底秘沈抄』のなかで、この御文を解釈して、「若し外用の浅近に拠れば上行の再誕日蓮なり。若し内証の深秘に拠れば本地自受用の再誕日蓮なり。故に知んぬ、本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」と仰せられております。

す。つまり神力品の文を挙げて、大聖人様こそが外用上行菩薩の再誕、内証久遠元初の御本仏であることを示されているのです。

最後のほうは少し急ぎましたけれども、初めのほうで詳しく言いましたので、だいたいはお解りになったかと思います。時間の関係で、本日はここまでしかできませんけれども、我々のなすべきは明年三月までに必ず、すべての支部が折伏誓願を達成することであります。これには、非常に大事な意味が込められていると、私は思います。

皆さん方も新聞や、あるいは実際に肌で感じていることが多いと思いますけれども、最近の天変地天と申しますか、天候異変もそうですし、さらに世界の至る所で争いが増えて、騒然としています。日本の国内も色々な問題が山積しており、世界中にも山積していますよね。

まさに、この時こそ、我々は『立正安国論』の御聖意^{しょうい}をしっかりと拝して、正を立てて国を安んずるとい^{やす}う原則をしっかりと知って、本当に一人ひとりが折伏に励んでいかなければなりません。

本日お集まりの四千人の方が、本気になって各講中で戦ってごらんください。皆さん方が本当に命懸けで戦いきっていけば、まず皆さん方の講中が変わります。講中が変われば、その地域が変わりますよ。そして、その地域が変われば、日本が変わります。日本が変われば、必ず世界が変わるのですよ。

その原点、原則は、本日ここにいらっしゃる四千人の方々の、一人ひとりの折伏です。このことを絶対に忘れないで、残り二百五十日余、広布に身を尽くしてください。必ず、一人ひとりが、大聖人様よりお褒めの言葉を頂けます。間違いありません。

だから、お題目をしっかりと唱えて、あらゆるチャンスを活かして、誓願達成へ向けて、一人ひとりが是非、立ち上がっていただきたいと、心から思う次第であります。

以上をもちまして、本日の講義を終了いたします。